

タイトル：2025 年度 教育セミナー（第 21 回）

日時：2025 年 9 月 18 日（木）～21 日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階 大会議室（303）

「1544 年の政変」再考：

トプカプ宮殿文書館旧蔵『枢機勅令簿』から見える近世オスマン朝

高田虎太郎(東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻修士課程 1 年)

今年度の中東☆イスラーム教育セミナーでは、日本各地から多様なディシプリンの院生が集まり、闊達な議論が交わされ、実り豊かな交流が行われました。元来日本の中東・イスラーム研究の中核であり、アジア・アフリカ言語文化研究所の先生方の多くが専門とする歴史学分野の院生はそれほど多くなかったものの、かえってそれゆえに異分野を専攻する方たちの研究や考えを学ぶ貴重な機会となりました。

今回は、多くの院生からの発表希望があったこともあり、受講生発表が 16、アジア・アフリカ言語文化研究所内外の先生方のセミナーが 6 と多種多様な研究に触れることができました。とりわけ印象的であったのは、マレーシアやインドネシアでのムスリムについての発表です。東南アジアにもイスラームが広がっていることは知識として認識していましたが、当地における多彩で豊かなイスラーム実践についての研究発表はとても刺激的でした。自分のイスラームイメージが中東のイスラームに固定化され視野狭窄に陥っていることが痛感されたため、今後他地域のイスラームについても学びを深めていこうと思いました。他方で、イスラエルにおけるインド系ユダヤ教徒についての研究発表も記憶に残っています。中東における様々なマイノリティー集団についてはわかっているつもりでしたが、まだまだ勉強不足であると思いを新たにしました。このように、今回の一連の発表からは、「中東☆イスラーム教育セミナー」という範疇が「中東かつイスラーム」ではなく「中東またはイスラーム」であり、豊かな広がりをもつものであることが感じられました。この経験は自分の研究を相対化して捉え直す上でも非常に有益であったと思います。

ただし、最終日にも話題になったことですが、とりわけ受講生発表について質疑・コメントの時間がやや不足していたような印象を受けました。とはいえ、発表を希望したものの時間的制約により発表を断られる院生が生じる事態は避けるべきであり、来年度以降発表時間をより短くし、質疑時間を十二分に確保するのも一案ではないかと思いました。受講生にとっても研究を簡潔に説明する訓練は重要であると思います。

また、自分の研究発表についても非常に示唆的な質問・コメントをいただくことができました。異分野を専門とする受講生・先生方からの意見には終始ハッとさせられることばかりでした。特に、黒沼太一先生からの「統治とは何であるか」という根源的問いは今後も熟考していこうと思います。

最後にこの場を借りて、大変有意義なセミナーを企画・運営してくださった近藤信彰先生

をはじめとする東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所関係者の皆様に感謝申し上げます。次は研究セミナーでご意見を賜りたいと思います。

(以上、本文 1132 文字)